

平成28年度 第10回（震災後第74回） 陸前高田市保健医療福祉未来図会議 議事録

テーマ：「日々のはまかだをノーマライゼーションという言葉のいないまちづくりへ
～第2回「(仮) はまかだスポットガイド」の作成に向けて～」

日時：平成29年1月20日(金) 13:30～15:30

場所：陸前高田市役所 4号棟第6会議室

参加：33名 15団体

資料：下記にアップ

<http://healthpromotion.a.la9.jp/saigai/rikuzentakata.html>

1 挨拶

尾形保健課長補佐：

今年度の未来図会議のメインテーマが「私から始める他人（ひと）ごと意識の解消」ということで、本年度第10回目を数える。ノーマライゼーションという言葉のいないまちづくりは、戸羽市長が震災直後から掲げている理念であり、昨年度はそのアクションプランも策定されたところである。その中で本日のテーマである、はまかだスポットの認定やマップの作成について具体的な施策の一つとして計画しており、ぜひみなさまと一緒に作成していきたいと思うので、よろしく願いしたい。

2 内容

(1) 未来図会議のめざすこと ～一人ひとりが元気になる地域づくりに向けて～

・陸前高田市地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏

(2) 報告（話題提供：仮）

報告 「健康医療とまちづくりをつなぐはまかだ、震災から6年の活動で見えてきたこと」

・一般社団法人SAVE TAKATA 代表理事 佐々木信秋氏
理事 吉田隆介氏

報告 「はまかだスポットガイド作成に向けて情報収集をしてみても」

・陸前高田市民生部保健課 生活支援コーディネーター 金野康子

報告 「ユニバーサルデザインのまちづくりの取組みについて」

・陸前高田市建設部都市計画課 計画係長 永山悟

(3) グループで「はまってけらいん、かだってけらいん」

- ・テーマ：ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくりにつながる、仕掛けはまかだとしての「はまかだスポットガイド」の活用方法について

①あなただったら、どんな風に活用しますか？

②どんな形、どんな形、どんな機能があると使いますか？

(※iPad で実際に触れてみながら)

(1) 未来図会議のめざすこと ～一人ひとりが元気になる地域づくりに向けて～

(陸前高田市地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏)

未来図会議は、健康で文化的な生活及びノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくりをどのように実現するか、特に保健医療福祉分野の視点から中長期的に考えるという姿勢をとっている。ただ、この地域づくり、まちづくり、コミュニティづくり、いろいろな場面に使われるが、中には誰かに何かをさせることが地域づくりと勘違いしている方がいる。ソフト面から考えればわかると思うが、幾らハード面が充実していても、人がつながっていなければなかなか健康なまちとは言えない。未来図会議は、どうやってそのつながりを強化するか、コミュニティをつくっていくかという考え方を共有する場である。

緩和ケアの話をしていただいた村上先生からも「人は話すことによって癒やされる」という言葉があった。そういうつながりが非常に重要だということ。この未来図会議でもソーシャル・キャピタル、地域のつながりを強化することを健康面からも考えている。「絆」は「きずな」と読むと同時に「ほだし」という部分、手かせ、足かせ、束縛、迷惑、この部分が非常に重要である。先日、NHKのプロフェッショナルの流儀でも紹介された豊中市社会福祉協議会の勝部麗子さんと雑誌で対談したが、彼女に教えてもらった言葉が「断らない福祉」。断らないとはどういうことかということ、自分ができなくても、誰ができるのかを考え続けること。まさしく地域づくりも同じような形であり、排除しない地域の「きずな」と「ほだし」、これはノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくりにもつながる。

ソーシャル・キャピタルの基本となるのが「信頼」「ネットワーク」「お互いさま」、この3要素がそろっているところでは、人は非常に健康になり、自殺も減る。さらに、まちづくりでもさまざまな効果があることがわかっている。人が交流できることでノーマライゼーションも促進される。安心して子育てができることで障がい者支援も進む。そういうことが進むと、自殺予防にもつながっていくと我々は考えている。

では、いつ、誰が、どうやってこのソーシャル・キャピタルを醸成するのか。陸前高田は「はまかだ浸透したまち」「はまかだスポット」などが、数多く生まれている。すなわちソーシャル・キャピタルの醸成は、はまかだスポット、通いの場づくりがどんどん進むことだと理解できる。そういう議論をきょうこの場で皆さんとともに確認したい。

(2) 報告 「健康医療とまちづくりをつなぐはまかだ、震災から6年の活動で見えてきたこと」

(一般社団法人SAVE TAKATA 代表理事 佐々木信秋氏)

皆様、こんにちは。一般社団法人SAVE TAKATAの佐々木である。隣が吉田、佐藤になる。佐藤が今回ご縁をいただいたが、このはまかだを中心としたコミュニティの形成を担当する職員である。吉田は、私が話をした後に、はまかだの一例を紹介するのでよろしく願う。

SAVE TAKATAは幾つか事業を行っているが、一言で言うと陸前高田のまちづくり会社である。例えば震災直後、情報を集める情報サイトをつくったり、生活用品から食料品、または机や什器関係も運んだ。ほかに、避難所運営支援ということで、物資の整理をボランティアと行い、「草刈り機が流されてしまった」という相談を受ければ、全国から中古の草刈り機を集めたり、寄附を募って買ったりした。また、東京で物産展を毎月1回開催するという活動など、復興支援と言われるものはほとんど行った。今は緊急支援の活動よりもいわゆるまちづくり、地域振興や産業振興などの3事業を行っている。

その1つ目が農業。米崎りんごという、おいしいリンゴが地元にあるが、そのリンゴの栽培だけでなく、担い手をつくるという意味で、地域内外から若年無業者、ニート、ひきこもりの子たちを受け入れ、自立支援としての農業体験を提供している。これは自立支援ではあるが、陸前高田を気に入って、好きになって住んでほしいという目的もある。ちょうどことし4月に初めて1人移住をする予定になっている。

2つ目、ICT事業。ホームページの作成、観光アプリの運営・企画をしている。あとは、ICTの技術を活用して、高校や中学校での授業の準備などを進めている。

3つ目、若者事業。大学生と一緒にイベントや情報発信をしている。

この3事業が、ありがたいことにそれぞれ広がりを見せており、まず農業と若者事業がNPO化し、それぞれ単独の法人として分社をする予定である。

今までお話ししたとおり、僕自身も何屋だと思っくらくいろいろやってきた中で、「復興したまち」「いいまちって何か」と問われることが多い。ただ、私も勢いでやってしまったというところもあり、考えても答えが出なかった。いろいろな人と出会っていく中で1つ結論が出たのが、そこにかかわっている、住んでいる人たちの答えが1本1本の糸だとすると、その糸がまじり合っ太いひもやロープになったまちが、「いいまち」なのではないか。「いいまち」をつくるというよりも、「まちづくりは人づくり」、そこに生き生きと暮らしている人たちをつくることだということだということで、今人づくりを重点に置いて活動している。

ただ、人づくりは、いわゆるコミュニティ支援と言われるものが多い。活動としては6年目になって、例えばイベント、お茶っこ会、いろいろな活動があり、それらを総じてコミュニティ支援という部類となる。それが「いいまち」になっていくために必要なのだろうが、私の中でもやもやとした、何かふわっとした感じで、コミュニティ支援がなかなかぴんとこなかった。

先ほども出たとおり、市のビジョンは「ノーマライゼーションという言葉のいらないまち」である。これは、一人一人が自分自身の、そして相手の障がい、年齢、セクシャリティー、病気、国籍といった個性を意識することのない、誰もが暮らしやすい、住みやすいまちという意味が込められている。この中で、私たちがやっていかなければならないことは、この理念を目指して、これをみんなで作っていきける状況をつくるのが活動のゴールなのではない

かと最近思うようになった。

では自分たちで人、コミュニティをゼロからつくっていくのは、少なくとも小規模であればできるかもしれないが、それがまちづくりとなるとかなり難しい。その中で、既存の方法や活動、政策はないのか探し、はまかだ活動との出会いがあった。

はまかだ歴でいうと、まだ半年にも満たないが、その中でもいろいろと気づきや発見があった。第1の気づき、心が健康でなければまちづくりに参加できない。第2の気づき、これは第1の気づきの逆説的な話かもしれないが、健康医療の分野だからこそ、まちづくりを意識する。私の考えだが、1つは健康医療とまちづくり分野、ひとの交流と協働である。顔が見えた関係性の中で、具体的な協働が生まれるというのはNPO活動をしているとも思うことなので、つなぎ役と言うとおこがましいが、きっかけづくりをしていきたい。これが仕掛けはまかだになると思っている。

理事 吉田隆介氏：

この写真は鎌倉で陸前高田の物産展をしているところで、青いはっぴを着ている方々が東京や神奈川、千葉からのボランティアである。これは、昨年4月に命名した「陸前高田応援隊」といい、目的は、陸前高田のファンを首都圏でふやすことで、主に陸前高田の物産展や交流会の活動をしている。活動の始まりは、東日本大震災発災後の2012年で約5年間、町田や鎌倉、首都圏近郊で開催し、開催数131回、ボランティア数は延べ1,147名になる。

5年間続けて気づいたことは、この物産展は単に物を販売する場所ではなく、陸前高田に縁がある人たちが集まる場所であること。参加してくれるボランティアは陸前高田の出身者や陸前高田に親戚、友人がいる方である。

物産展の会場は毎回変わるが、参加するボランティア同士、共通の思いを持って集まれる場所として、今後も継続していきたい。

(2) 報告 「はまかだスポットガイド作成に向けて情報収集をしてみよう」

(陸前高田市民生部保健課 生活支援コーディネーター 金野康子)

昨年の9月の未来図会議で、皆様に市内8町ごとにはまかだスポットの情報をいただきマップにしたが、その情報をもとにスポットの取材に行った。その中から何か所か話をしたい。

まず、矢作町にある片地家花壇の会。この会は片地家仮設の住民の方々が中心となり、花壇の整備を通して住民の交流の場として活動している。この場所は、自由に出入りしていいので、ぜひとも足を運んでいただきたいということだったが、中心となって活動されている方がこの春に高田町に新居ができ、仮設から卒業する。しばらく通って手入れをしていきたいというが、高齢でもあり、いつまで通えるかとても不安に思っているという話である。私から、「マップをつくってみたい」と言ったときに、「誰か手入れを手伝ってくれる人がいないか、募集してくれないか」という話だった。実際にマップが実用化すれば、そういう情報を掲載し「私が手伝いたい、私もやってみたい」という声が出て、新たにはまかだ生まれ、つながりができるといいと考えている。

もう一つ米崎町の松ぼっくりの会。こちらは既に10年近く活動している会で、健康体操

やレクリエーションなどを行っている。新規の会員は募集していないそうだが、自分たちが活動をして、「こんなに元気だ」ということを皆さんに知ってほしいという声があった。

このようにマップを通じてほかの地区の活動を知って、「これなら自分たちにもできる」と新たにほかにスポットがふえるきっかけになるのではないかと考えている。皆様からの情報は、地域の宝物。この宝物を皆さんと一緒に探し出したり、新たにたづねつけていけたらいいのではないかとと思うので、今後とも協力いただきたい。

地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏：

災害FMで佐々木亮平さんとやっているラジオ番組だが、これがホームページにアップされている。ホームページにリンクを張っておくと映像は出てこないが、音声は聞ける。こういう使い方もあるということ、今後活用していければと考えている。

(2) 報告 「ユニバーサルデザインのまちづくりの取組みについて」

(陸前高田市建設部都市計画課 計画係長 永山 悟)

市役所の建設部都市計画課で働いている永山である。よろしくお願ひしたい。

これは今泉の高台からまちを臨んだ写真だが、大きな被害を受けゼロからのまちづくりという状況である。市長も「新しいまちをつくる、語弊を恐れずに言うとチャンスでもある」と言っているとおりに、いいまちをつくっていきたい。その中でノーマライゼーションという言葉のいらぬまちづくり、そしてユニバーサルデザインのまちづくりを進めていきたい。

これは、新しいまちの模型、高田地区と今泉の話だが、低地部には防潮堤、復興祈念公園ができ、かさ上げをして周りに住宅地、中心市街地、高台にも住宅地ができる。特にこの中心市街地での取組みは、ノーマライゼーションという言葉のいらぬまち、簡単に言うと誰もが来て便利ぬまちをつくることである。

具体的にわかりやすいところとして、区画整理事業で道路や公園をつくるが、市で協定を結んでいるデザインを専門にした会社(ミライロ)に依頼し、目の不自由な方、車椅子の方、弱視の方に道路の舗装がどうなっているか、さわって、見てもらひ確認している。公共施設など建物についても使い勝手のいいものにしていくため、ユニバーサルデザインがきちんと配慮されているか、ミライロに確認してもらひながら進めている。

ユニバーサルマナーの研修。これはノーマライゼーションの全体の取組みになっているが、ハード整備だけではなく、気遣いの面も市役所職員や関係する事業者に呼びかけ、学ぶ取組みもしている。

ハード整備に関しては、公共施設、市で整備する建物はもちろん、新しく中心市街地に出てくる建物や店、事業所にもユニバーサルデザインを配慮したい。皆さんの各テーブルに1冊ずつユニバーサルデザインチェックリストを配布してあるが、それを記入し申請してもらひ認証する。そして市できちんと配慮した店であることをホームページ等で発信する取組みを行っている。

これは中心市街地の模型だが、図書館や広場、一本松記念館、博物館、海と貝のミュージアム、市民文化会館などを町なかを集めて、いろいろな用足しができる場所にしたい。また

皆さんのお手元にも配ったが、新しい市街地に出店を予定している店をマップに落として、あらかじめPRしておく。この特徴として、震災前から散らばっていた店を、特にやる気のある、出店の希望がある方をまちに“ぎゅっ”と集めて、買い物しやすいようにする。それにあわせて駐車場も用意し、公共交通も広場に集約して、外からも移動しやすいまちにしておく予定である。新しいまちは、はまかだがしやすい場所がたくさんできるので、アイデア等をいただければと思う。

(3) グループで「はまってけらいん、かだってけらいん」

- ・テーマ：ノーマライゼーションという言葉の知らないまちづくりにつながる、仕掛けはまかだとしての「はまかだスポットガイド」の活用方法について

1 グループ発表：代表者：

まず足が必要だということ。例えばコミュニティバスやマイヤのバス、ボランティアで運べる仕組みがあるといい。高齢者はタブレットなど使えない方もいるので、印刷機能や災害FM、はまかだ通信（広報）など、デジタルとアナログをつなぐ形が必要。

また、タブレットも使える場所が少ないので、役所の入り口やコミュニティホールなど、できるだけ多くの場所に置いて、復幸マップのような個人でもダウンロードできる形にしてもらえるといい。はまかだの情報も、行政サービスや民間サービスを含め、総合サービスにすると使い勝手がよくなるのではないかという意見も出ていた。

2 グループ発表：包括支援係 蒲生紋子保健師：

はまかだスポットが、まだまだある。もっと議論を続けなければいけないという話が出た。

活用については、相談員や民生委員の集まりで紹介する。活動している方の顔が見える、電話番号があるとつながりやすい。活動のお知らせ、イベント開催のお知らせに活用できる機能もあればいい。困り事を解決してくれるマッチングがあるといいという意見があった。

3 グループ発表：代表者：

タブレットを使うのが苦手な方、特に年配者はチラシから導入するといい。また、タブレットを使うのに、つなぐ方（若い方）が1人は必要。窓口や訪問時の際に紹介できる。また、目的別にジャンルをつけるとわかりやすい。例えば保健、御飯、トイレなどジャンルごとの地図が統一になれば使いやすくなる。市のホームページにリンクできるといいという意見が出た。

4 グループ発表：保健係 蒲生恵美保健師：

活用方法は、「はまかだスポットガイド」をまずは見て満足したい。できるだけ多くの人に使ってほしいので、市役所や病院に置く。高田を知らない人に案内をするときに使いたい。イベントを企画する際、人が集まっているところなどを検索して、その場所に行き、イベントを開催することもできる。

機能面について、高齢者でも気軽に触れられるように音声ガイド、読み上げ機能があると使いやすい。あと目的別の検索や現時点で活動している（リアルタイム）場所などが出てくる機能があるといいということが挙げた。

地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏：

今の段階で、これよりさらにバージョンアップしたものを将来的にはSAVE TAKATAにお願いしたいと考えている。

HP(<http://iwamuro.net/saigai/hamakadamap.html>)を見ていただきたいが、コミセン、公民館は一つのレイヤーとしてつくってある。行政サービスはそう簡単には変わらないので、レイヤーをつくっておくといい。陸前高田はまかだマップはサロンを1つ追加すると、色や目次を合わせたりするため、一回全部消さなければいけないが、それほど難しいことではない。これは、ほとんどアクセスのない未来図会議のホームページにリンクしてあるので、ぜひうちに帰ってパソコンをいじっていただくと、「これも入れたい」というアイデアも浮かんでくると思う。

3 その他連絡・アナウンス

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

1月21日から、陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウム2017が開催する。皆様、またお知り合いの方にお知らせをいただければと思う。

2月11日、子どもの心とあゆみを支えるシンポジウムを釜石で開催する。いつもお世話になっている子どもグリーンサポートステーションの大塚先生が講話されるので、こちらもよろしく願います。

及川氏：

りくカフェ通信冬号ができたので、ごらんいただきたい。呼吸法が書いてあるが、どの年代にも大事なことなので、参考にさせていただきたい。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

名古屋から日高さんが来ているので、一言願います。

日高氏：

私も昭和区というところに勤めているが、介護予防のサロンプロジェクトを立ち上げ、地域の居場所づくりに取り組んでいる。名古屋市は小学校区ごとの社会福祉協議会がないところが多いが、昭和区は唯一11学区、全部ある。サロンがたくさんできていて、そのデータ整理（サロンプロジェクト）のため、保健所だけではなく、包括支援センターや社協の職員も合わせて27人ぐらいで67カ所をインタビューに回り、どういう行政ニーズが必要かをまとめて、今度発表することになっている。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

次回は2月17日、「住民と創る医療」を予定している。そして年度内最後は3月17日だが、会場が陸前高田市コミュニティホールに変更になっているので注意してほしい。

◇次回：平成29年2月17日（金）

メインテーマ（仮）：住民と創る医療

会場：市役所4号棟 3階 第6会議室